北海道新聞　第3種郵便物認可

赤ちゃん13人 産声元気に

小樽協会病院 分娩再開から2カ月

小樽協会病院が6月末に3年ぶりに分娩の取り扱いを再開してから約2カ月がたち、これまで13人の赤ちゃんが誕生した。関係者は順調な滑り出しに安堵する一方、今後のリスクの高い妊婦の受け入れに向けては、妊産婦や新生児のケアも担う助産師の不足などが課題になっている。（谷本雄也）

「地元で産める環境 心強い」■ 助産師確保が課題

小樽協会病院はリスクの高いお産も扱う道の「地域周産期母子医療センター」に後志管内で唯一指定されているが、医師不足で2015年7月以降、分娩の取り扱いを休止していた。札医大から産科医の派遣が決まり、今年6月末から分娩の取り扱いを再開した。

再開に合わせ、陣痛、分娩、回復を同じ部屋で行えるLDR室を改修した。広さは約26平方㍍。トイレやベッド、ソファなどが備えられ、部屋の移動がなく妊婦が落ち着いた環境で出産に臨めるという。

同病院では再開後、今月28日までに13人が誕生し、このうち小樽市の菅原志帆さん(38)は7月に次男虹心ちゃんを出産。小学1年の長男(7)と幼稚園児の長女(5)も同病院で産んだため、分娩を再開すると聞いて同病院を希望した。

菅原さんは「子ども2人がいる状況で、札幌の病院に通うのは難しいと思っていた。地元の病院で産むことができて、かなり心強かった」と振り返る。

産婦人科主任医長の黒田敬史医師は「信頼を損なわないよう慎重に再開したが、今のところ大きな事故もなく安全に分娩できてほっとした」と話す。

ただ、現在は妊婦の受け入れを月10人までとし、分娩の取り扱いもリスクの低い妊娠37週目以降に制限している。助産師は新卒者も含めて7人いるが、「助産師が足りず、これ以上の受け入れは現時点で難しい」（産婦人科）という。

黒田医師は「地域周産期母子医療センターの役割を果たすため、まずは第一歩を踏み出した段階」とした上で、「助産師の確保やスキルアップ、小児科の体制の充実など課題はあるが、地域の期待に応えられるよう、早く軌道に乗せたい」と話している。

小樽協会病院で出産し、1カ月健診を受ける菅原さん（右）

1日にお産考える講演

小樽協会病院は9月1日正午～午後1時、住ノ江1の同病院2階講堂で、第9回ふれあい健康教室「安全なお産のためにできること」を開く。

黒田敬史医師らが、安心安全に出産できる環境をつくるための家庭や職場での心掛けなどについて講演する。同病院は「家族や地域、職場でできることを一緒に考えるきっかけにしてもらえれば」と来場を呼び掛ける。入場無料。問い合わせは同病院☎0134・23・6234へ。

©北海道新聞社